

となしに、無事解決した。

この長州開罪の使者を、西郷吉之助(南洲)とする史家もあるが、それは誤りで、鼎州が岩國に行つてこの大役を果したのである。

總督徳川慶勝は鼎州の功を賞して、袈裟・文台・硯箱・書檮、並びに年五十石を贈つた。これらの品は、今も養賢寺に秘蔵されているが、見事な逸品であるという。

養賢寺の記録によると、鼎州は安政三年八月養賢寺を退隠して上京、元治元年前記のように長州説得に奔走し、その後も滞おたまるとまゝなかつたが、慶応三年、徳川幕府の崩壊、王政復古の大号令が出たのを見て、又し振りに佐伯の養賢寺に帰つた。

その後、明治三年十月、鼎州は佐伯を後に、再度上京している。これは同年の禁固騒動に關係があつて居づらくなり、直前に佐伯を去つたものとされている。

それからの鼎州は、京都妙心寺の龍泉庵に隠棲し、明治七年六月癸を以て没し、同寺に葬られて波瀾の生涯を終つてゐる。

このように、明治維新の前夜、僧鼎州は國事に奔走した力であつたが、私どもは、鼎州の出自や幼少時代、さらに僧侶としての修業歴などを詳しく知りたい。同様にその静かな晩年、遷化前後の様子など、あまりにも知らな過ぎる。

龍鼎山養賢寺の歴代住職については、高德をもつて伝えられてゐる方が多く、また佐伯に金石の文字を残さずにいる方が多い。いま鼎州和尚の百年祭に当り、私どもはあらためて、國事に尽くしたその生涯を、もつともっと身近に知らなくてはならないと思つた。

(大分県歸入会・増村氏、佐伯脚書)及び「佐伯市史」による。

旅行記

臼杵石仏から内山観音へ 青山巽次郎 犬良 善 男

去る四月十日、私共黒沢の老人クラブ一同が、楽しんでいたバス旅行の日であつた。臼杵から三重、そして三國峠をめぐる観桜もかねた研修旅行であつた。

午前七時半出発、参加人員三十五名、貸切バスは佐伯から国道二一七号線を走る。上浦海岸から峠を越え、津久見からまた峠を越したが、さすがは国定公園の海岸の絶景である。舗装は出来てゐるがカキの連続である。

十時少し前、臼杵石仏に着く。マイクを肩にした案内者がなれた口調でまくし立て、七、八回も「日本」という言葉を使った。僕は石仏は三度目、しかし初めての人が多く、随分珍らしく観たようであつた。案内者は「炭焼小五郎」の伝説もつけ加えたが、僕にはよく判らないが、事実かも知れないと思つた。

再びバスに乗つて、十二時前三重町に入り、内山観音に参拝した。寺の境内一面に咲き競う桜にまず眼を奪われた。本堂をはじめ数々の建物、さすがに歴史の古さがかがえる。天気はよし、桜は満開、よく調査のとれた光景に、みんな今日の仕合せを満喫した。

「お晝は峠で……」ということ、バスは峠道をたどる。延々とつづく桜、峠近くは少し早いならぬと予測も裏切られ、頂上まで爛漫たる花のトンネルであつた。

晝食は三國峠頂上の広場、ここは西南戦争の古戦場であるが、その草原で楽しい酒肴に舌鼓とつ。酒もすすいだので老人らしい悪声をはりあげて、歌が出る、詩吟がはじまる……。

それから宇目町に下つて、無事夕方帰宅した。(終)